

第2章 遺品類の調査報告

天明の大火（天明8年（1788））で罹災した大船鉾は、文化元年（1804）に巡行参加を果たし、装飾品等は文化年間（1804-18）に徐々に整えられていく。現存する装飾品等の遺品類は、この時に整えられたものがほとんどであり、復原に際しては、これら遺品類から鉾本体のスケールをはじめ、行装の全体像を割り出した。遺品類のほとんどは水引等の布類で、他に若干の金工品があり、それぞれに遺品類の内容及び、保存・改変の状況等を記した。

1. 染織懸装品

藤井 健三

元治元年(1864)の大火で焼失した大船鉾だが、幸いに難を逃れた懸装品類は明治 8 年(1875)に町内に分散して保管され、その後も祭礼の会所飾りとして用いられて昭和 44 年(1969)には修理が行われ、現在は京都府立総合資料館に寄託されている。平成 19 年に京都市の調査を経て、京都市有形民俗文化財の指定を受けた。

調査が、平成 18 年度に京都市文化財保護課が行ったものと、平成 23 年度に本事業に際して行ったものと、大きく 2 回あることから、前者を (a)、後者を (b) としてその成果を記した。調査の内容は、前者 (a) が染織懸装品及び房類の現品調書を、後者 (b) が懸装品の修理経緯などを中心に記述している。

なおここでは、今後の利便性に鑑みて、収納箱毎に記述し、最初に箱書等の情報を記載した。

【箱 1】 現在使用されている箱に記銘はないが旧箱の記銘部分が収納保管されている。

旧箱蓋表銘「十四日船鉾 金幣 南組」・旧箱蓋裏「文化十歳次癸酉六月」

1. 「真紅大総」大房（金幣箱に同収納） 縦 146.0cm（1 掛）

(a) 絹製の紅染大房で、組紐部と房の外面に褪色が見られるが、房内部に元の本紅染の色彩が美しく残る。金幣と同収納され、金幣、幣躰、幣串と同時期の製作と考えられる。

【箱 2】 本箱に記銘、また旧箱の記銘部分（蓋部）を収納保管する。懸装用の主要な幕類が本箱に収納されている。

現箱蓋表墨書「本鋸縫裳式」・蓋裏「昭和四十四年七月調 文化四丁卯年調達の
本箱損傷激しく新調為記念箱書箇所保存 四條町 作博物館国宝修理所」

旧箱蓋表墨書「猩々緋胴幕二張、唐綴木綿二張、猩々緋水引二張、漆引二組、水引二張、木綿前後二張、緋紐袋壹張、船鉾町」・蓋表貼紙「三十号 本鋸縫裳式 四條町有 林成口」

旧箱蓋裏墨書「文化四丁卯年六月」・蓋裏貼紙「浪ニ大龍模様 本鋸用水引五枚、金地ニ龍模様日天幕二枚、羅紗敷物緋毛氈一枚、赤青ダンダラ 2 枚、唐草模様三枚六枚、緞子戸張三枚壺組、黄赤胴巻五枚、黒房大四懸、中四懸、水色房十枚（墨で消す）、綸子戸張三枚、孔雀模様金糸縫三枚、胴巻見送りクワノ紋木綿ノ前當一枚、毛氈赤四枚、以上立札及棒二札」

2. 「金地雲龍文様錦」 天水引幕（左・右）

(a) 縦 56.0cm 横 453.0cm、縦 56.0cm 横 453.0cm（2 枚）

金地に雲龍文様を織り表した錦織の幕で、雲龍文様と共に地部も総て金糸で紋織をした総文様の織物。5m弱の織丈で龍と瑞雲を織りだし、左面と右面の幕を図替りにして作っている。使用金糸は上質で、絵糸を全越仕様に織って緻密な図柄を表した並外れて贅を尽した織物である。生彩を放つ龍の表情は画家下絵を思わせ、繊細な線描と明るい色調が江戸後期 19 世紀初め頃の製作を考えさせる。

(b) (幕形状の概要と改変 (仕立直し) について) : 主櫓に懸装された天水引幕の元の長さ構成は不明だが、現在は 2 枚の幕形で遺され、恐らく全幕が遺っているものと推測される。だが、現幕は既に裏地を替えて仕立直しがみられ、また懸装用の鞆と鞆受け位置が変更して付けられ、さらに、現幕の上辺際に僅かにずれた旧縫い目が確認でき、確実に仕立直しが確認できる。縫い目跡からして元の仕様と寸法的には大きな差異はないと思える。

(幕の寸法と母屋形について) : 上記の 2 幕で主櫓の軒周囲を回して懸けていたとすれば、また 2 幕を連結する旧鞆受の位置を勘案して全長を求めれば、その長さを主櫓の軒周囲として考えることができ、 $(460-6.8)+(445-5.3)=892.9$ となり、主櫓の軒周囲を仮に約 893cm と想定できる。

(幕仕様と母屋形の柱位置について) : 幕に描かれる龍と瑞雲の図には明らかに摩耗跡がみられる。これを柱との摩耗跡と考えれば、主櫓の柱間寸法の前後巾と左右巾を導き出すことが可能だといえる。ただ、櫓の柱が 6 本だとする古記録に対し、2 枚の水引幕の摩耗跡は 4 ヶ所しか見出だせない矛盾がある。摩耗跡を 6 本柱の内の角の 4 本の接触跡だとすれば理解できなくはないが疑問も残る。仮に幕の擦れ跡の間隔を根拠に 4 本の隅柱の前後左右の柱巾を導けば、主櫓の柱間隔は左右辺が約 280cm、前後辺の間隔が約 170cm と想定できる。

3. 「緋羅紗地波濤龍文様刺繍」欄縁下水引幕 (舳先) (1 枚)

「緋羅紗地波濤龍文様刺繍」「窓絵唐草文様綴錦」欄縁下水引幕 (5 枚)

(a) 左舷・右舷前 : 縦 77.0cm 横 202.0cm、左舷・右舷後 : 縦 77.0cm 横 279.0cm、
舳 : 未採寸

裏布墨書「神功皇后 御神前鋳 三枚之内 干時明治四十五年壬子七月修覆四條町」(左舷後幕白木綿裏布)、「枚之内」(左舷後幕浅葱木綿裏布)

裏布墨書「神前鋳用三枚… 明治四十五年壬子七月修覆之 御慶賛寄附連名池田善三郎 (他略・計十七名) 四條町」(右後舷幕)

裏布墨書「神功皇后 御神前鋳 三枚之内 明治四十五年壬子七月修覆之 四條町」

舷の欄縁下に懸かる水引幕で、左舷前、左舷後、右舷前、右舷後、舳先、後方 (舳

櫓下)部の6枚の幕に分けて遺されている。各々上部に一番水引幕と下部に二番水引幕を縫合して構成し、一番水引幕を二番水引幕の上に少し重ねて縫っている。ただし、舳先部は二番水引を伴わず、該当すると思しき寸法の二番水引幕の「窓絵唐草文様綴錦」が額装されて別に遺っている。艫部は二番水引幕を伴うものの中央に三角形の切込みを設けており、切込みは水引幕と舵上部との接触を防いで削除されたものである。

昭和44年に京都国立博物館内の国宝修理所で修繕と仕立直しが行われ、その際に裏地の上部を新布に替え、そこに元銘に倣って墨書している。裏面下方に旧幕の浅葱木綿を再利用しており、そこに元の墨書の一部が残る。

現在、水引幕が収納される箱内に保管される旧箱の墨書に、文化4年調整の猩々緋水引があることを記すが、これらに該当するかは判断不可。

「緋羅紗地波濤龍文様刺繍」(一番水引幕部分)は、欄縁下に懸かる6枚の水引幕のうち、上部に懸かる一番水引幕で、緋羅紗に波濤龍文様を刺繍する。大方は直繡技法だが、一部に切付繡い、巻立繡い、駒縦取繡い、縫繡切繡い、駒詰繡い、オランダ返し繡い、締め繡い、巻取繡い等の多様な繡技を見せる。金糸は2種と色糸との糸遣いがあり、一部に墨の加彩もみられる。また、龍眼に吹ガラスを用い、龍と波濤の粗密を考慮した構図など江戸後期織物類に共通する色遣いがみられ、製作期もその頃と考えられる。現在、全面に金糸の剥落を押さえた細かな綴じ繡いと同じく繡糸の剥落を止める大まかな膝り繡いが見られる。

「窓絵唐草文様綴錦」(二番水引幕部分)は、経糸にS撚諸糸を用いて曲寸間45枚、緯糸はZ撚諸糸で織密度が曲寸間120本と精緻な表現の綴織である。上質な金糸を用いた日本製綴織で緯糸に紅、萌葱、縹、藍、茶、黄、白色の濃淡を使って、光沢ある金糸と鮮明な薄色を多用した江戸後期化政期頃の特徴が見られる。蘇芳染紫糸と茶色糸は鉄媒染による鉄錆発生のために糸が贅化して多所に剥落をみる。また紅糸の褪色も著しい。6枚の内、左右の後部に懸かる2枚の下辺に江戸期の和更紗を用いて覆輪をする。

(b) (幕形状の概要(枚数、模様、仕様、仕立直し)): 船縁に懸かる水引幕には舳先の幕1枚、船縁中央部の左右2枚の幕、艫部左右の2枚の幕、そして舳先正面に懸かる幕1枚の計6枚が遺されている。ただし、舳先の縁の幕は元は別々だった2枚の幕を縫合して1枚に仕立替えられたもので、本来は都合7枚の幕として存在したと考えられる。これら水引幕6枚は会所飾り用に仕立て直されて、厳密に原形を保っていない。

(幕形の概要(現形)): 舳先部と艫部下水引幕は船首尾の形に合わせて先端の尖った形、また前後幕も全体に弧を作って仕立てられていたようだが、現在は会所飾

り用に長方形に仕立て直されている。中央部の幕は元から長方形に作られていたと考えられる。

(幕の改変(枚数と寸法)について): 2枚の幕を繋いだ現在の舳先部は縫合時に各々先端部を僅かに切断しているようだ。また、中央部の幕も元のままに長方形だが、幕両端をやや短く切り揃えて仕立て直しされているようだ。そして艫部の2枚も若干だが中央部幕と連結する片端を短く切断して仕立てられているようである。さらに弧形の舳先と艫部も上下辺に三角形の飛羅紗を襜で補填して長方形に仕立て直している。このように6枚(元は7枚)の水引幕は改変され、舳先、中央、艫部の現幕を並べても図柄は繋がらない。

(幕の改変(元の長さ)の検討): 上記幕の他に、下水引幕は上下二段で色分けした木綿製の常用幕(後述)がある。この常用下水引幕は舳先部から艫部に亘って一枚物の仕様で作られ、左右幕2枚が仕立直しのない原形の儘で遺されていることが確認できている。会所飾りに利用されずに原形を保持したものと思われ、なおこの常用水引幕と緋羅紗地波飛龍図刺繍下水引幕の舳先と中央・艫部の合計長を比較しても全長が一致せず、刺繍下水引幕が仕立直しで確実に短くなっていることがいえる。元の幕形と模様図から推して、舳先部と中央部の間で約10cm、また中央部と艫部の間で約20~30cmが欠失していると考えられる。現幕の両端を解いても縫い込みがなく、切断されているようだ。

(舳先前面幕について(二番水引幕との関わり)): 舳先前面に懸かる水引幕は他の水引幕のように下辺に二番水引幕を縫合していない。だが、他の下水引幕に縫合されている「唐草四陵花文窓に宝相花文綴錦」と同じ裂断片1枚が額装されて別に遺り、それが本幕巾に相当していて本幕下辺に縫合されていた元二番水引幕の可能性が窺える。幕の装着について忠実な絵画資料である大船鉾保存会所蔵の絵(岡本豊彦画)にも、舳先前面幕の下辺に同図の二番水引幕が描かれており、二番水引幕を縫合していた可能性が高い。ただ、現在の舳先前面幕の高さが他の下水引幕と二番水引幕を縫合した長さを有していて、現舳先前面幕に二番水引幕を縫合すると長くなるという矛盾がある。装着方法を含めて検討の余地がある。

(舳先前面幕に付く銙り金具について): 舳先前面幕の左右端上下部分に、桐の形の生地の変色跡と金具を取付けた穴痕が遺っていて、元は銙り金具が装着されていたと考えられる。それと共に、この部分に用いられたらしい4個の桐の形金具と座金が遺されている。

(幕の改変(縫い縮めと元の規格)について): 左舷艫部下水引幕の裏地の一部を解くと、上辺縫込み内に元の表地の一部と上辺部に付く白木綿竿袋生地部が縫い込まれていた。また最初の裏生地である浅葱木綿布が現裏地の下に縫い込められて遺されているのが見える。ただ、幕下辺に縫合される二番水引幕の裏地の詳細は確

認できなかった。察するに、下辺部は不確定だが上辺部は幕巾を確実に縫い詰めて縮めた仕立て直しがされ、また左舷中央部水引幕裏地の縫い目の一部を解いても、上辺緋羅紗地の曲代内に当初仕立時の墨打線が遺されており、墨線から僅かに折込んで(1~2cm)仕立直しがされている。中央部分については大きな幕巾変更がないようだが、幕下辺は同じく二番水引幕が縫合されているために縫込み内を確認できないものの、一部に表の刺繍が縫込み箇所に折り込まれ、また刺繍部分を含めて緋羅紗地が切断されているのを確認できた。つまり、上下辺ともに元より縮められて仕立直しされているのが解る。

(幕の改変(緋羅紗および刺繍生地)の切断)について：中央部下水引幕の左右両端の縫い込み部を見ると、刺繍をした表の緋羅紗地部が切断して縫い込まれ、全長を短くして仕立直しがされたことを確認できる。

4. 「緋羅紗地鳳凰文様刺繍」舷櫓櫓下水引幕(左・右・後) (3枚)

(a) 左舷：縦 62.0cm 横 121.0cm、右舷：縦 62.0cm 横 127.0cm、後：縦 62.0cm 横 147.0cm

緋羅紗地に鳳凰を刺繍した水引幕。進行方向に向かって上下方に飛翔する鳳凰を左幕と右幕に、また振り返って舞い降りる正面図の鳳凰を後方幕に繡う。刺し繡い、折り返し繡い、縫切り繡い、纏い繡い、相良繡いなどの色系の繡技と、金糸の駒刺し繡い、締め繡い、巻立繡いなどをする。鳳凰の顔のみは切付繡いとし、金糸と色系を多種に用いて写生的な細かい表現をするも、図様はやや硬い表現が見られる。刺繍の一部に孔雀糸を使用し、また鳳凰の目のみでなく尾羽根にガラスを嵌入して繡うのも日本製として珍しい。孔雀糸は本邦では 18 世紀後半以降である。現在の目は近年修理時に合成樹脂製のものを補填している。作風と技法から江戸後期製と考えられ、天保 10 年から安政 4 年の間に描かれたとする「祇園祭礼図屏風」に本幕らしい図が描かれており、製作期をその頃とするのに異論はない。修理は昭和 44 年および 45 年で、裏布はその時の後補。

(b) (幕形状の概要(枚数、模様、仕立直し))：櫓櫓欄縁の下水引幕は南面後方幕 1 枚と東西面左右幕の 2 枚、計 3 枚共に裏地裂が取替えられ、会所飾り用に仕立直しがされている。ただ、3 枚共に旧裏生地を芯地に使っており、縫い目を子細にみると大きく寸法に変更はなかったようだ。

(左舷・右舷、元幕からの改変(幕の縫い縮めと切断))：左舷幕の左端および右舷幕の右端に、元の緋羅紗表面部が縫い込まれた形跡と断ち切られた跡が見られ、寸法に若干の変更があったことが確認できる。上辺と下辺も鳳凰図の配置からして若干短くして仕立て直されていると考えられる。

(南面後方幕、元幕からの変更(幕の縫い縮めと切断))：後方幕の左右両端に仕立直しに際して緋羅紗地を切断した跡が見られ、こちらも幾分短くして仕立て直されているようである。仕立直しの際の短縮分は生地の変色跡や摩耗跡から判断して各々約2～5cm以内と想定できる。

(隅鋸り金具の装着跡について)：右舷幕の左端(裏の縫い込み部)および左舷幕の右端の中央上方と下方に、桐文様の鋸り金具を装着した緋羅紗の変色部分、および金具を取付けた足穴跡が遺る。現在はそこへ緋羅紗共生地を嵌めて修理をしている。また芯地に用いて遺されている旧白木綿裏地にも同位置に穴がある。後幕の左端および右端も同様の桐文様の鋸り金具の跡がみられ、これらから右舷と後方、また左舷と後方の幕を繋ぐ角に桐文様隅金具が施されていたことがいえる。だが、該当する鋸り金具は遺されていない。

(緋羅紗織耳について)：これら3幕共に下方の縫い込み内に3本の黒筋を染める熊耳と呼ばれる緋羅紗の織耳部があり、江戸後期に輸入された緋羅紗に共通する特徴だと認められる。

(旧縫い目の仕様について)：右舷幕左端の元の縫い目線は下方でやや内側に傾き、幕巾が下方で狭くなっているように見られるが、左舷幕右端や後方幕の両端にそうした形跡は見られず、本仕様は故意的でなく偶然の所作と判断できる。

5. 「黄・緋羅紗縫合」常懸下水引幕(左・右) (4枚)

- (a) 左舷前部：縦77.0cm 横171.5cm、右舷前部：縦77.0cm 横171.5cm、
左舷中央部：縦77.5cm 横336.0cm、右舷中央部：縦77.5cm 横336.0cm、
左舷後部：縦77.0 横144.4cm

現在は左舷前部、右舷前部、左舷中央部、右舷中央部の5枚の幕が遺る。修復をみるも、銘記がない。緋と萌葱羅紗縫合の胴幕と共に昭和45年(1970)に修理されたと考えられる。

本水引幕も上下二分割で幅を構成し、上段を幅広の緋羅紗、下段を幅狭の黄羅紗を用いて縫合する。舷欄縁下水引幕の一番水引と二番水引の仕様に倣って作られる。前部幕と後部幕を繋ぐ鞆穴を前部幕に穿ち、後部幕に牛角製の鞆をつける。幕に鞆を利用するのは珍しい。裏布の白木綿は当初のものと思われるが、修理が入っていてその際に吊用の新しい乳布をつけているが不思議に上下辺共につけている。江戸後期から近代初頭に製作された幕と推せる。全体は簡易な仕様で常用水引幕だったのでないだろうか。

(b) (幕形状の概要と元の規格)：常また雨用に用いたと思える船首から船尾を覆う長い一枚物の下水引幕左右面2枚が遺されている。他の幕のように外形を変更し

た仕立直しの様子はなく、銚焼失以前の大きさと形を遺していると思われる。現在、修理と改変を経た巡行用下水引幕の形や焼失した銚の外形と寸法を知り得る重要な手掛かりの可能性を持つ。

(幕の改変(常懸下水引幕に付く二番水引幕))：外形と概観に大きく変容はないと思えるも、緋色木綿の下辺に縫合される黄色木綿布の二番水引部は後世に付け替えられたものであり、また舳先前面幕との連結には現在は鞆材をつけるが、元は舳先前面幕との連結は紐で結ったと考えられる。

6. 「緋・萌葱羅紗縫合」胴懸幕(左・右) 左右共に未採寸(2枚)

(a) 裏布墨書「敷物六枚之内 明治四十五年壬午七月修覆之 御慶發起人 岡島卯三郎(他略・計17名)」(左舷幕)

裏布墨書「敷物六枚之内 四條町 明治四十五年壬午七月 □□□□□□修覆賛成 寄附員連名 池田善三郎(他略・計十名)」(右舷幕)

左舷と右舷部幕の2枚が残る。だが、裏布墨書に「六枚之内」とあって枚数が合わず、また「敷物」とある。江戸後期の天保10年(1839)から安政4年(1857)の間に描かれた「祇園祭礼図屏風」に緋羅紗と萌葱羅紗を縫合した胴幕が描かれており、絵画資料からみても胴幕だったのに間違いない。羅紗地を敷物によく利用したことから誤記したのだろう。だとすれば、前掲の黄と緋の羅紗地を縫合する水引幕の4枚があり、本幕と合わせて都合6枚になる。緋羅紗と萌葱羅紗を縦接して胴幕に仕立てており、本幕は材質からして当時のものと考えられる。昭和45年の修理時に新しい乳布をつける。

(b) (幕形状の概要)：現在は2枚が残されるが、箱の記録には「六枚の内」とあって合致しない。また、寸法からして胴の左右両側面の前方舳先部と中央部・後方艫部に分けて作られた幕6枚の内、左右中央部2枚の幕ではないだろうか。

(幕の利用変更について)：現在の胴懸幕は中央部の2枚を遺し、舳先部と中央部の4枚が欠失したと考えられ、この中央部2枚の裏地に「敷物」と記されることから、敷物に再利用されたと思える。長方形でない舳先と艫部の4枚は敷物に不適として廃棄されたのだろうか。

(幕の改変(仕立直し))：裏地は近年の製品とみられる白木綿帆布が用いられ、全面をミシン縫製で行っている。かつ旧の縫い目が見当たらず、かなり縮小した形で仕立て直しがされているのではないかと思われる。現幕から元の幕の寸法を導き出すのは困難。

7. 「縹地窠紋様・白無地縫合」前掛幕 縦 272.1cm 幅 65.1cm (1枚)

(a) 長尺の幕で上部に紺染木綿裂をつけ、下方には白木綿を縫合した幕。紺地木綿の中央に糊防染技法で大きな窠紋を白く染め抜き、上辺 2 か所に乳布、また左右に各 7 本の括り紐をつける。幕の形と大きさ、さらに紐付けがあることから舐先に掛かる前掛幕と考えられる。常用の前掛幕ではないだろうか。裏布に白木綿を用い、修理や改造がなくて江戸後期から明治初期の製作が推せる。

8. 「黒色大房」「黒色小房」飾り房 (各 4 掛)

(a) 黒色大房の 4 掛と、黒色小房の 4 掛が同梱で収納される。これらの懸装位置は不明。黒染による鉄錆発生の贅化が少し見られる。

【箱 3】 蓋表墨書「昭和四十四年七月三十一日 作博物館国宝修理所」

9. 「巴窠紋金糸繡額付・緋地波濤龍文様綴錦」前懸幕

(a) 縦 131.0cm 横 51.0cm (1枚)

綴織で波濤龍文様を表した縦長の幕で、上部を緋羅紗地の広い額縁仕立にして、そこに金糸繡で大きく窠紋と巴紋を横に並べて繡う。窠紋と巴紋を厚い肉入繡とするが、新しい様子から近時(昭和 44 年の修理時)の製作かと思われる。また波濤龍文様綴錦は S 撚諸糸を経糸に使用して曲寸間 45 枚の綴織とし、緯糸に Z 撚諸糸を用いて密に織られて経緯糸の用方から日本製と判断できる。中国製綴錦の図を倣うが、全体の構図が柔和で個の文様も日本的表現が多く見られる。とくに下部の山岳波濤文様は中国製に見ない日本的表現であり、金銀糸を密に織り、細密図で明るい色の使用から江戸後期 18 世紀後半も遅い頃の製作が考えられる。上質な綴錦である。

(b) (幕形状の概要)：昭和 44 年に京都国立博物館内国宝修理所で修理されるが、それ以前に施されたと思われる唐撚糸の駒繡い修理が多所に見られる。また昭和 44 年の修理時に幕の仕立直しが行われて裏の木綿布が取り替えられている。額縁の緋羅紗地に旧裂を再利用するが、上部の窠紋と巴紋刺繡部の緋羅紗と綴錦部の額縁緋羅紗が別裂であり、2 種の緋羅紗を縫合して作られている。綴錦も図から判断して当初より幕幅が狭められていると思え修理時に相応の改変があったとみられる。恐らく綴錦と繡紋部は別の幕だったと思えるが、確証はない。左右の緋羅紗地に計 6 個の飾り金具を付ける。雲龍文様綴錦の額縁に用いる緋羅紗地は、洗浄と再仕立が行われた形跡が見られる。また上部の巴紋と窠紋の額部の金糸刺繡は近年の製作と考えられる。

(幕の改変(仕立直し)について)：旧から新幕への再仕立てによって僅かな「ず

れ」を縫製痕で見られるも、概して原状を守って仕立てられている。ただ、2種の緋羅紗地が用いられていることや裏生地の様子が異なっていることから現在の上部額部が当初からの形なのかが判断できない。幕前巾約 640mm、またそれに比して製作当初に残る常用前懸巾が約 65.1 cmと同寸で、本幕が明治期の仕立直しによっても大きな変更はなかったと考えられる。

10. 「葱色小房」 (10 掛)

(a) 浅葱色の褪色した小房。緋地波濤龍文様綴錦前掛幕の左右辺緋羅紗部に飾る小房。

【箱 4】 蓋表墨書「綴錦 □□ (墨書二字の上に白紙を貼る) 後懸 四條町」

蓋裏墨書「文化四丁卯年六月 昭和廿九年八月新調」

11. 「緋地雲龍文様綴錦」後懸幕 (艦隠幕) (綴織部)

(a) 縦 140.5cm 横 91.0cm (1 枚)

額縁の左右下辺に緋羅紗を回した「緋地龍文様綴錦」の幕。経糸は曲寸間 45 枚だが、一枚の製作に拘らず中央部の経糸が Z 撚諸糸、左右辺部が S 撚諸糸を用いた変則的な用方の綴織で類例は少ない。だが、緯糸の Z 撚諸糸の様子や金糸の作調から間違いなく日本製の綴錦で、図は額付中国製壁掛装飾綴を模写したものであり、上部額部を除いて作っている。龍、瑞雲、八宝、山岳波濤文様が中国製より優しく表現され、とくに波濤文は日本的な青海波で、山岳も和風に描かれる。全体に明るく彩られて 19 世紀初頭の邦製綴錦の色調を示すが、紅染の緋色をはじめ全体に褪色が進んでいる。

本紙の日本製の雲龍図綴錦を中央に上辺に白色上質木綿布を用い、また左右辺と下辺を緋羅紗で巾広に額縁様に囲んで仕立てている。裏面は白色木綿布を用い、左右辺に細く緋色呉羅服連地を繋ぐ。近年の修理や仕立直しは見られないが、緋羅紗の一部に僅かな損傷をみる。額縁の緋羅紗に計 14 個の飾り金具を装着しており、取付け手法など幕の装丁にも古様な感がある。

(b) (幕形状の概要) : 緋羅紗は一度洗浄した形跡がみられ、仕立直しが窺えるが、縫製痕などをみると寸法や仕様には大きな変更がみられない。裏地裂の交換はなく、裏面に付く幕巾を支える細い棒の差渡し装置も 2 本の内の 1 本を失うが元の儘。新旧縫製跡から推して幕全体の寸法と仕様に大きな変更を見ない。

(幕の改変 (仕立直し、修理)) : 本紙の雲龍図綴錦は経年相当の破損が進み、補綴や穴埋めの修理が見られる。修理は素人手のようだが手順よく行なわれている。雲龍図綴錦の退色が著しく、織裏面にも退色がみられることから裏返しをして裏面

利用している可能性がある。

(幕の今後の使用について)：本幕の現状は損傷と退色が著しく見られるため、今後の使用は不可としたい。

【箱 5】

12. 「黒色小房」後掛幕飾り房 (左・右) (16 掛)

(a) 緋地龍文様綴錦後掛幕の左右辺の緋羅紗の上に懸かる小房。

【箱 6】 蓋表墨書「舵 猩々金龍縫」

蓋裏「昭和四十四年七月調 明治四年調達の木箱損傷激しく 新調為記念箱
書箇所保存 四條町 作博物館国宝修理所」

旧箱蓋表板墨書「于時明治四歳六月 猩々緋金龍縫楫 南四條町」

13. 「緋羅紗地波濤龍文様刺繍」舵羽板幕 (右・左) (計 2 枚)

(a) 縦 158.0cm 横下辺 119.0cm 上辺 70.0cm

変形の台形舵板に左右対称形に刺繍製作された緋羅紗地波濤龍文様 2 枚を表裏に貼り付ける。緋羅紗地に波濤雲龍文様を直繡いし、縫切り繡い、刺し繡い、巻立繡い、抜取り繡い、駒詰繡いなどの繡技を用いる。龍の一部に厚い肉入れ繡をする。刺繍幕を舵板へ直接に装着するため、龍眼のガラスは緋羅紗地を切り抜いて裏面より装填している。紅色には退色を見るが、全体に色彩と刺繍がよく残されて良好な状態である。龍の刺繍と瑞雲の彩色には陰影表現がみられて近代的な表現であるが、化学染料は用いられず、江戸後期から幕末期の製作。別製の網房飾りを下辺に垂れるが、金糸が外れて損傷を見る。舵板の下辺両隅に補強金具をつける。

14. 「濃紺七宝文様網房飾」舵裾部組紐飾り 横 119.0cm (1 枚)

(a) 上半部を輪繫ぎ (七宝) 文様の網物とし、下方に小房を連ねる。

【箱 7】

15. 「窓絵唐草文様綴錦」額装綴錦裂

(a) 縦約 26.0cm 横 78.0cm (紋様部 69.0cm) (1 枚)

舷欄縁下水引幕に用いられる二番水引幕の窓絵唐草文様綴錦と同裂。額装されているにも関わらず損傷や使用痕跡が見られる。記録はない。舷欄縁下水引幕舳先部には、本来は付くべきこの窓絵唐草文様綴織の二番水引幕がついていない。綴織柄部の 69.0cm と舳先幕幅の 61.0cm が近似していて、元は舳先部欄縁下水引幕の二番水引幕だったのではないかと推測できるが、昭和 44 年 (1969) の修理時に外されて額装されたものと考えられる。

【箱 8】いずれも近代以降、近年の製作を収納する。

16. 「浅葱色小房」「紅色小房」「黒色小房」[付・別] (各 8 掛・4 掛・8 掛)

(a) これらの小房は幕類の隅部や周辺を飾る房と考えられるが、懸装箇所の確認をできない。浅葱色小房は紺地に窠紋と巴紋木綿水引幕、艫屋同天水引幕、金地龍文様天水引幕に懸ける房、また緋色と黒色小房は艫櫓水引幕等の飾り房ではないかと考えられるが、確証はない。

「縹地雲文様」艫欄縁下水引幕 (左・右) (2 枚)

「緋地窠紋様旗」

「縹地巴窠紋様」艫屋欄縁下水引幕 (左・右・後) (3 枚)

「吹流し」

「白地波文様」地隠幕 (左・右・前・後) (4 枚)

「紫地巴窠紋様木綿印染」艫櫓欄縁下水引幕 (左・右・後) (3 枚)

「紫地巴窠紋様木綿印染」艫欄縁下水引幕 (左・右) (2 枚)

「黄・赤」艫水引幕 (左前・左後・右前・右後) (4 枚)

【箱 9】白木唐櫃

蓋表墨書「神面箱」、中蓋墨書「明治四拾五年七月改 仁□親□□□□ 覺書
禁裏御所拝領 御□□□□□ □戸張…」

身底墨書「文化十二年乙亥 夏六月 十四日船鉾町」(旧唐櫃蓋裏利用)

旧箱墨書「□書 此函片ハセ成表地 近衛殿ヨリ神衣奉納セラヌヲ 今回有志者
新調シ 而シ此表面板□□念珠ス 神事山 神功皇后御装束願主近 (以後板
切断) 明治四拾五年壬子七月神具一切整理ス 本町役一派協議而シテ此函片
ヲ永存ス 發起人委員中川和昭 松柳平三エ門 岡島卯三郎」、「天保十亥年
六月吉日 新町四条下北四条町 神事山 神功皇后御装束箱 近衛殿御寄附
引柏 (板切断) 取次奥 (板切断)」(2 枚保管・唐櫃の底に収納)

17. 「緋地縮緬腹帯」御神体装束 (付・緋地縮緬包裂)

(a) 長 372.0cm 幅 14.0cm (1 枚)

蓋表墨書「神功皇后直躰御腹帯」、底板「宝歴十三年 新町組 未六月 北四條
町」

紅染の緋縮緬絹を織幅二折りにして袋縫いにする。濃色の紅染だったと思われるが、全体に褪色が見られる。使用の縮緬は江戸期に見る薄地の二越縮緬である。

18. 「薄地緋縮緬裂」(付・包裂)

(a) 縦 48.0 cm 横 42.0 cm (両織耳有り) (1 枚)

裏布墨書「奉献天明六年歳六月吉日 北四條町 田邊宗兵衛」

御神体装束の緋地縮緬腹帯を包む裂地とされる。薄手の二越縮緬の紅染裂で、濃

い紅色彩が残る。両織耳部分があり、裂地の右下角に奉納年と寄進者の墨書を入れる。

19. 「白地紗綾形に葡萄文様袱紗」御神体装束 縦 56.0 cm 横 52.5 cm (1 枚)

(a) 裏布墨書「文化四年丁卯十二月 北四條町 願主 林氏敬白」

5 枚縹子地の紋織白生地綸子で作る袱紗。中国製と思われる広幅織物を用い、裏布は白地薄羽二重を付ける。右下隅に年記と寄進者を墨書し、御神体腹帯の寄進を記念して裂地で袱紗形を作ったものか。

20. 「白地薄羽二重裂」御神体装束 縦 59.5 cm 横 47.4 cm (両織耳有り) (1 枚)

(a) 墨書「安政五午年六月 寄附 北四條町」

薄地羽二重でつくり、年記と寄進者を墨書する。御神体腹帯の寄進を記念したものか。

21. 「薄地緋縮緬裂」御神体装束 縦 58.5 cm 横 47.0 cm (両織耳有り) (1 枚)

(a) 墨書「文化四年丁卯十二月 北四條町 森氏敬白」

薄地二越縮緬の紅染裂で、現在も濃紅色が残る。両織耳があり、裂地の左下隅に年記と寄進者銘を入れる。御神体腹帯の寄進を記念して裂地を保管するものか。

22. 「鶴鳳凰牡丹菊文様錦懸守袋」懸守・外袋 未採寸 (1 袋)

(a) 神功皇后御神体の装着する懸守外装用袋の錦織裂。カ紋に鶴丸、向鴛鴦の丸、牡丹花丸の三柄を段文様に並べ、緋地に萌葱、黄、縹、白の絵糸を交替させて織り表す。倭錦と呼ばれる古様織物だが、本織は古式な緯錦組織でなくて平組織地に絵緯で織りだす近世以降の錦織である。また別搦みで綴じるなど江戸時代後期の織技を示している。

23. 「雲龍宝尽し文様銀欄懸守装丁裂」懸守・表面装丁布 未採寸 (1 枚)

(a) 懸守の本体金属部に外装する錦織裂。緋に雲龍宝尽し文様を織りだす銀欄であり、経 3 枚綾地地搦綴じの織技に比して古風な図柄仕様を見る。だが、表現が部分的で織技に緻密さを欠くことから、古様を倣った江戸後期の製作ではないか。

24. 「白地羽二重神功皇后御腹帯」懸守内容品 未採寸 (1 枚)

(a) 墨書「奉納 嘉永四年亥六月 神功皇后御腹帯 十四日舟鉾」

織幅を持つ約 3.5m 長の薄地白羽二重裂である。小さく畳まれて懸守の内容品としてあり、新品の状態が保たれている。裂地全体に大きく墨書で奉納の年記を記す。

25. 「黒染絹糸」御神体頭髪 未採寸

(a) 絹糸を黒染して紙で束ねる。糸質および色調から江戸後期から近代の製作か。

26. 「緋地袷半襦袢」「緋地精好袴」御神体装束 未採寸・未調査 (1着・1腰)

【箱 10】黒塗唐櫃

27. 「緋縮緬地菊唐草文様刺繍襦袢」御神体装束 (1着)

(a) 襦袢：丈 89.0 cm 衿 60.0 cm 袖丈 40.0 cm 袖幅 28.0 cm 衿幅 6.0 cm

前身幅 21.0cm

腰帯：長 370.0cm 幅 14.0cm (1腰)

墨書：(寛政 7 年の墨書銘があるという)

紅染の薄地二越縮緬を用いて作られた袷襦袢。衿部分に金糸両駒繡の菊唐草文様を刺繍で表す。寛政 7 年の墨書があるというが、今回は未確認。緋色の紅染がやや褪色し、金糸が変色をしている。淡紅染をした木綿裏を付けて袷仕立にする。腰帯が付随する。

28. 「黄地幸菱文様綾地錦小直衣」御神体装束 (1領)

(a) 丈 126.0cm 衿 96.0cm 袖丈 77.0cm 袖幅 76.0cm

畳紙墨書「神功皇后 御狩衣 四條町 昭和四十六年新調 竹重装束店」

経 3 枚綾組織地に堅四目菱文様を一カ間文で織った黄地錦を用いて小直衣を仕立てている。半越仕様の地搦み綴じの縫取織技法で身頃を堅の四目菱文様、また襷部は横四目菱文様に織り、縫製後に全体が堅四目菱文様となるように作る。襷部を有した天皇専用の狩衣が小直衣で、裏地に黄色無地平絹を付ける。化学染料を使っており、近代の制作である。

29. 「紫地鳳凰丸文様頭紋紗狩衣」御神体装束 (1領)

(a) 狩衣身丈 153.0cm 衿 94.0cm 袖丈 73.0cm 袖幅 74.0cm 付帯長 151.0cm 幅 8.0cm

畳紙墨書「神功皇后 御狩衣 明治四拾五年壬子七月新調 四條町 装束荒木伊助」

くすんだ紫鼠の三振れ頭紋紗地に鳳凰丸文様を平様紋組織で地紋を織る。曲 3 寸ほどの丸紋を二カ間紋で互位置に置く。経糸に白、緯糸に茶紫を用いた織色綾にするが、近代初期の塩基性染料特有の褪色（くすみ）が見られる。明治期の製作である。

30. 「白紋綾地三重十六菊紋刺繍」唐櫃覆（松竹梅鶴文様白地綾）」(1枚)

(a) 未採寸

畳紙墨書「本金御定紋附 白紋綾御唐櫃覆 壹 大文字屋七右衛門」

立涌に松竹梅鶴文様を織った白綾地に金糸で菊紋を駒詰刺繍をする。本裂を使った唐櫃が明治 45 年製作であり、織物もその期に調整されたもので、近代の制作である。

31. 「白羽二重裂」

(a) 未採寸・未調査

墨書「明治四拾五年壬子七月 岡島氏在役中新調之 四條町 神功皇后御神前御幌」

32. 「白地縹子飾り襟」御神体装束 (1 枚)

(a) 未採寸・未調査

墨書「神功皇后 御鎧衿 明治四十五年新調」

33. 「縹子地縹袴・白羽二重帯」御神体装束 未採寸・未調査 (1 枚)

【箱 11】

34. 「紺地卍繋ぎに華文様錦戸張」

(a) 縦 196.0 cm 横 56.0 cm 縦 176.0 cm 横 87.0 cm (1+2 枚)

紺の経 5 枚縹子組織に、紅と萌葱の地緯を用いて地揚文の錦織をする、二重緞子と呼ばれる織技であり、江戸後期の製作と考えられる。裏地に白木綿を付ける。

35. 「白地御簾檜扇葵文様縹子戸張」

(a) 長 184.0 cm 幅 48.0 cm (5 枚)、縦 162.0 cm 横 72.0 cm (1 枚)、
縦 165.0 cm 横 73.0 cm (1 枚)

経 5 枚縹子地に緯 5 枚縹子で御簾と檜扇、葵文様の地紋を織った白地緞子。近代の制作と思われ、裏地に白木綿をつける。

36. 「木綿紺地白抜窠巴紋印染水引幕」

(a) 長 464.0 cm 幅 77.0 cm (未確認)

木綿地に窠紋と巴紋様を糊防染で白抜きにした藍染の印染水引幕。幕上辺に紺染木綿の別裂をつける。中島荘陽筆の掛軸や「祇園祭礼図屏風」に見る欄縁下緋羅紗地波濤龍文様刺繍水引幕上に懸かる紺地窠巴紋様幕がこれと考えられる。江戸後期から明治期の製作と思われる。

(b) (幕の概要と元の規格) : 概観から本幕は仕立直しの様子はなく、巾や丈も原形を示していると思われる。鉾本体の舳先部の巾が分かる好資料である。

(幕の改変) : 本幕とそれに繋がる左右の常懸下水引幕を結ぶ紐位置には不自然さがあり、後に紐を付け替えたと考えられる。

37. 「白麻地幔幕」 未採寸

(a) 白麻布を縦接に継いで作った幔幕。未調査。

【箱 12】

38. 「模様染羅背板毛氈」 未採寸

(a) 緋地羅背板に華唐草文様を捺印したもので、江戸後期に欧州から舶載されたもの。

【箱 13】

39. 「緋羅紗」 未採寸

(a) 江戸期の古い緋羅紗が敷物として数枚残るが、今調査では未確認、未調査。

2. 金工品

久保 智康

大船鉾に用いられた金工品で伝存しているものは、以下の通りである。

- ・大金幣の幣串に装着された飾金具
- ・前掛の縁に装着された飾金具
- ・後掛の縁に装着された飾金具
- ・舵の押縁金具
- ・舵黒房金具
- ・神功皇后天冠

詳細に実見し得たものは幣串金具と前掛金具である。それらを中心に、概要を報告する。

1. 幣串金具

串先金具、串側面に装着された筒金具、紋金具、房掛金具がある。

串先金具（図1）は、銅・鍛造、鍍金の方形桶形の入八双金具。全面を細かに整列打ちした魚々子地とし、天井面に木瓜紋、側面に菊唐草文を丁寧な蹴彫りで表している。入八双形筒金具も同様の造作・意匠になり、また舵の入八双形押縁金具も同様とみられる。

唐草文自体、江戸時代飾金具の通有の文様であるが、本品のそれは、菊花の弁脈を細かに表すのみならず、裏菊や側面菊など、様態を凝らすという特徴が見出せる（図2）。これと酷似した菊唐草で、裏菊の花弁の間に刻点を打ち詰める細部表現まで一致する金具が、三重県伊賀上野天神祭の向島町・鉄英剣鉾（旧称は花鉾）の破風や軒先の入八双金具に見られる（図3、久保「楼車と印の飾金具」『三重県指定無形民俗文化財 上野天神祭総合調査報告書』上野市教育委員会、2001年）。

鉄英剣鉾に関する部材の箱の墨書年紀は文化11年（1814）に集中し、その建造年が明らかである。楼車本体は名張市新町に譲渡されているが、



図 1



図 2



図 3

それに金具類はほとんどつかないので、金具類は今の鉄英剣鋒に再利用されたとみるべきである。すなわち現用の飾金具は、文化11年の製作と判断できる。ひるがえって、大船鉾の幣串金具の箱には「文化十歳次癸酉六月」の墨書があり、同じ時期における、おそらく京都の同一工房作と考えてよいであろう。

紋金具と房掛金具（図4）も、銅・鍛造、鍍金で、同時期とみていい。祇園社神紋を高肉に打ち出した金銅金具は、寛政年間、18世紀末を遡る山鉾の欄縁に伝存例をいくつも見出すことができる。細部にまで破たんのない彫技を凝らした佳品である。



図4

2. 前掛金具

雲龍文を織り出した前掛の左右縁に6枚が装着される（図5）。銅・鍛造、鍍金で、鉄線唐草を細緻に透彫りし、花卉や葉の中ほどを鋤彫りで立体的に表して、毛彫りによる葉脈まで、写実を追求している。

鉄線唐草は、その旺盛な繁殖力から、町の繁栄の含意する意匠として、各地の祭屋台の装飾で好んで用いられた。しかるに本品で注目しなければならないのは、唐草の先端に括りをつけた奇妙な表現である。じつはこれと同様の表現が、やはり上野天神祭の小玉町・小叢山の屋根の妻軒付に打たれた雲文透彫り金具にみられる（図6）。このような特殊な表現は、偶然の一致でなく、鋳工房や製作時期を同じくする指標というべきである。

小叢山の屋根廻りの飾金具は、他町の楼車の金具との比較から、文政年間（1818～30）頃の製作と想定している。大船鉾前掛金具も、おおむね同時期の製作とみていい。

このように、大船鉾の飾金具は、上野天神祭の楼車金具と共通するところが大きい。

それは、江戸後期の山車祭の盛行に伴って、京都の鋳工房が、周辺地域の金具製作を積極的に請け負った状況をよく示しているといえるであろう。その意味でも、伝存する金工品は、極力再使用して、後世に伝えていかねばならないと考える。



図 5



図 6